

# 心理的反発を喚起する言語刺激のタイプ

深田 博己

(1990年9月11日受理)

Verbal stimulus types arousing psychological reactance

Hiromi Fukada

The purpose of present study was to investigate what types of mothers' verbal stimulus aroused psychological reactance among their children. Two independent variables were used: situation (real and imaginary situations) and response condition (rejective and acceptive response conditions). Sixth graders ( $n=1101$ ) were asked to write their mothers' verbal stimulus which aroused them reactance. Results indicated that Command Type of mothers' verbal stimulus facilitated their childrens' reactance and that Reward-Concession Type inhibited it. Methodological advantages of using an imaginary situation were discussed.

Key Words: psychological reactance, verbal stimulus, imaginary situation.

## 問題

### 1. 過去の反抗研究

社会的地位関係における劣者が優者に対して示す否定的反応を反抗という。反抗に関する心理学的研究は、極めて少なく、関(1958)、中西(1959, 1971)、深田(1983, 1986 a, 1986 b)が散見される程度である。関(1958)は、文化の型と反抗の関係を考察し、反抗期の問題に言及している。また、中西(1959)は、子どもの反抗行動の発達的变化を検討し、中西(1971)は、父親、母親および教師に対する子どもの反抗を分析している。

他方、反抗現象に心理的反発理論(Brehm, 1966; Brehm & Brehm, 1981; Wicklund, 1974)を適用した研究に深田(1983, 1986 a, 1986 b)がある。これらの研究では、母親の言語的脅威に対する子どもの反抗が検討された。母親の言語的脅威とは、子どもの行動の自由に対する脅威であり、子どもに特定の行動を強制したり禁止したりする言語刺激を意味する。そして、反抗は心理的反発として捉えられている。

小・中学生の言語的反抗に及ぼす母親の言語的脅威の影響を検討した深田(1983)は、順態度的脅威(子どもの初期態度と一致する脅威)に比べて、反態度的

脅威(子どもの初期態度と反対の脅威)の方が反抗を引き起こしやすいことを証明した。続いて、幼児の言語的反抗に及ぼす母親の言語的脅威の影響を検討した深田(1986 a)は、女兒では順態度的脅威と反態度的脅威の差を見い出せなかったが、男児では、順態度的脅威に比べて反態度的脅威の方が反抗を生じやすいと報告した。また、小・中学生の心理的反抗と言語的反抗に及ぼす母親の言語的脅威の強度の影響を検討した深田(1986 b)は、弱脅威に比べて強脅威が反抗を生じやすいことを発見した。心理的反発理論の立場からのこれらの3研究は、理論からの予測をおおむね支持し、反抗現象に対して心理的反発理論を適用することの妥当性を実証した。

### 2. 投影法的手法による反抗研究の問題点

心理的反発理論の立場からの反抗研究は、略画(深田, 1983, 1986 b)や人形劇(深田, 1986 a)によって、仮想反抗場面を設定するという投影法的手法を通して行われた。このほかに、中西(1971)も略画を用いた投影法的手法を採用している。

上述の4研究では、いずれも、脅威者の言語刺激を一定に保ちながら、あるいは何通りかに固定しながら、そうした言語刺激によって生じる子どもの反抗を測定している。しかし、これらの研究は、どのようなタイ

プの言語刺激が子どもに反発や受容をもたらすかについての資料のないままに進められてきた。したがって、従来の研究とは逆方向のデータ収集が必要となる。すなわち、脅威に対する子どもの反応（反発あるいは受容）を固定しながら、そうした反応を生じさせる脅威者の言語刺激を探ってみる必要がある。

子どもの反応を固定して、そうした反応を生じさせる脅威者の言語刺激を研究するにあたっては、2種類の研究方法をとらねばならない。第1の方法として、従来の反抗研究との比較を可能にするために、投影法的手法による仮想反抗場面を使用する必要がある。第2の方法として、実際に子どもが脅威者からどのような言語刺激を受けているのかを把握するために、実態を測定できるような現実反抗場面を使用する必要がある。すなわち、従来の反抗研究で使用されてきた投影法的手法に加えて、実態調査の方法を併用することが望ましい。

なお、本研究では反抗場면을限定し、先行研究（深田, 1983, 1986b）で使用されている「子どもがテレビを見ているときに、母親が勉強を強制する場面」を取り上げ、母親の言語的脅威と子どもの反抗の問題にアプローチしたい。

### 3. 目的

- (1) 子どもの反発反応あるいは受容反応を生じさせる母親の言語刺激を測定し、その特徴を比較検討する。
- (2) 子どもの反発反応あるいは受容反応を生じさせる母親の言語刺激を、子どもの直接経験に基づく現実場面と投影法的手法に基づく仮想場面の両側面から測定し、比較検討する。

## 方法

### 1. 研究計画と被験者

場面要因（現実場面、仮想場面）と反応要因（受容反応条件、反発反応条件）の2要因を独立変数とし、母親の言葉を従属変数とした。2つの独立変数は、いずれも被験者内変数であり、 $2 \times 2$ の要因分析計画とした。

被験者は、島根県松江市内の4小学校と鳥取県米子市内の5小学校の6年生1,206人であり、その内訳を表1に示す。このうち、無回答箇所がある場合、不適切な記述をしている場合（例：母親のことばでなく、自分の反応の理由を述べている；ことばでなく、母親の行為を説明している）、測定内容に照らして被験者としての条件に欠ける場合（例：テレビがない；母親がいない）などの不完全な回答を示した159人をデータ分析の対象から除外した。したがって、最終的な有効被験

表1 被験者の内訳

	男子	女子	計
松江市立O小学校	89	82	171
N小学校	77	95	172
T小学校	94	87	181
U小学校	97	91	188
米子市立Y小学校	93	91	184
T小学校	53	56	109
M小学校	49	35	84
A小学校	19	36	55
S小学校	56	60	116
有効回答	547	554	1,101
無効回答	80	79	159
計	627	633	1,260

者数は1,101人であった。

### 2. 研究手続きと実施期間

学級ごとに、学級担任が調査用紙を配布し、その場で被験者に記入させて、回収するという集合調査法の形をとって実施した。調査は、1984年9月から10月にかけて実施した。

### 3. 研究材料

#### (1) 調査用紙の構成

調査用紙はB4大の用紙1枚である。調査主体は島根大学幼年期教育研究室であると明示し、調査用紙の冒頭に次のような説明文を印刷した。「私たちは、日常生活の中で、勉強についておかあさんがこどもに言うことばを研究しています。それで、小学生の皆さんの考えを知りたいと思います。この調査は、学校の成績には関係ありませんし、正しい答えやまちがった答えもありません。ですからあなたの考えを、だれにも相談しないで、きらかに書いてください。協力をお願いします。」（注：難しい漢字にはすべてルビが振ってある。以下同様）。

調査は5問から成り、最初の3問は、被験者が実際に母親から言われることばを問うものであり、現実場面である。問3は補助的に用いた問であり、本論文では結果について触れない。最後の2問は、略画を用いて登場人物の子どもが母親から言われたと思うことばを問うものであり、仮想場面である。

これらの問に対する被験者の回答は、すべて自由記述によって求められた。

なお、調査用紙は、男子用と女子用の2種類があった。2種類の調査用紙の違いは、後半2問の仮想場面

における登場人物を、被験者が男子の場合には「太郎」としたのに対し、女子の場合は「花子」としたところにある。

(2)現実場面・受容反応条件(問1)

初めに、「この調査は、あなたが6年生になってからのことをききます。」という指示があった(問2にも共通)。次に、「あなたがテレビを見ているときに、おかあさんから勉強するように言われて、勉強する気になったことがありますか。」と尋ね、1. よくある、2. ときどきある、3. まったくない、の3選択肢の中から1つ選んで回答させた。そして、「1または2に○をつけた人にききます。それはどんなことばでしたか。思い出してことばを書いてください。」と、該当者に自由記述によって回答を求めた。すなわち、母親から勉強を強制されて、それを受容した経験のある被験者に対してのみ、そのとき使用された母親のことばを記述するように要求した。

(3)現実場面・反発反応条件(問2)

「あなたがテレビを見ているときに、おかあさんから勉強するように言われて、勉強する気がなくなったことがありますか。」と尋ね、問1と同様の手順で、該当者に母親のことばを自由記述させた。すなわち、母親から勉強を強制されて、それに反発した経験のある被験者に対してのみ、そのとき使用された母親のことばを記述させた。

(4)仮想場面・反発反応条件(問4)

初めに、「下の絵を見て、あとの質問に答えてください。これは太郎君(花子さん)の家のできごとです。太郎君(花子さん)は、あなたと同じ小学校6年生の男の子(女の子)です。」と場面設定をした。主人公の太郎(花子)とその母親が登場する略画によって、2つの下位場面を提示した。第1場面では、「今、太郎君(花子さん)はテレビを見えています。そこへおかあさんがやってきて、太郎君(花子さん)になにか言いました。」という解説が付けられ、第2場面では、「太郎君(花子さん)は、おかあさんになにか言われたため、『勉強なんかしないぞ(勉強なんかしないわ)』と思いました。」という解説が付けられていた。これらの略画の次に、「おかあさんは、太郎君(花子さん)にどんなことを言ったと思いますか。おかあさんが言ったと思うことばを想像して書いてください。」と質問し、自由記述によって回答を求めた。

(5)仮想場面・受容反応条件(問5)

場面設定は基本的には問4と同様であるが、第2場面のみが問4と異なる。第2場面では、「太郎君(花子さん)は、おかあさんになにか言われたため、『勉強しよう』と思いました。」という解説が付けられている。

表2 分類可能な反応数(比率)とその条件差

	受容反応条件	反発反応条件	差
現実場面	832 (75.6)	517 (47.0)	$P < .001$
仮想場面	1,101 (100.0)	1,101 (100.0)	<i>n.s.</i>
差	$P < .001$	$P < .001$	

略画の次にくる質問と回答形式も問4と同様である。

## 結果

### 1. 分析方法

#### (1)回答状況

回答状況とその分析結果を併せて表2に示した。表2によると、仮想場面では、受容反応条件でも、反発反応条件でも分類可能な母親のことばを記述していた。ところが、現実場面では、分類可能な回答が少なく、特に反発反応条件では減少している。これは、母親から勉強するように言われて、「勉強する気になったことがまったくない」被験者や「勉強する気がなくなったことがまったくない」被験者が、現実には相当数存在することを意味する。すなわち、母親から勉強を強制されても、受容反応や反発反応が特に生じたことのない被験者がいることが原因である。こうした被験者の中には、「母親から勉強するように言われたことがない」と答えた被験者26人を含む(両条件に共通)。現実には、母親の言語的脅威によって反発が生じない子どもが半数に達する点は非常に興味深い。

以後は、分類可能な反応に基づいて分析を進めることにする。したがって、以後使用される分母は、表2に示された数値である。

#### (2)分類手続き

条件ごとに4色に色分けした縦13cm×横9cmの4種類のカードを作り、1人の被験者の自由記述回答を条件に応じて4種類のカードに転記した。このほかカードには、被験者番号などを記入しておいた。

カードを分析する際に次のような基準を用いた。①回答が2個以上あるときは、原則として最初に書かれたものを採用する。②回答が1個でも、内容が複雑なときは、重点が置かれていると判断できる箇所を採用する。③ことばの語尾、文の配列など、そのことば自体がもつ意味や内容にほとんど関与しないものは無視する。

上記の基準に基づき、表現と内容が同質であるカー

表3 分類カテゴリーの名称、内容および具体例

- 
- 1 強制・禁止型：勉強の強制あるいはテレビの禁止
    - 1.1 罰提示勉強型：罰を提示した勉強の強制
      - 1.1.1 勉強しないと何もしてやらないと脅す（勉強しないと食事抜きですよ）
      - 1.1.2 勉強しないと体罰を加えると脅す（勉強しないと叩きます。怒ります）
      - 1.1.3 勉強しないとテレビを見せないと脅す（勉強しないとテレビを見せません）
      - 1.1.4 勉強しないと他の強者に言いつけると脅す（勉強しないと先生に言いつけます）
    - 1.2 禁止型：テレビの禁止
      - 1.2.1 テレビを禁止する（テレビをやめなさい）
  - 2 非難・皮肉型：テレビばかり見て、勉強しないことへの非難・皮肉
    - 2.1 非難型：テレビばかり見て、勉強しないことへの非難
      - 2.1.1 テレビのせいで成績が悪いことを非難する（テレビばかり見ているから成績が悪いのよ）
      - 2.1.2 テレビばかり見ていることを非難する（テレビばかり見て。勉強はいつするの）
    - 2.2 皮肉型：テレビばかり見て、勉強しないことへの皮肉
      - 2.2.1 勉強しないことに皮肉を言う（勉強しているところを見たことがないよ）
      - 2.2.2 テレビを見ることに皮肉を言う（勉強もこのくらい熱心にすればね）
  - 3 命令型：勉強の命令
    - 3.1 単純命令型：勉強の直接的命令
      - 3.1.1 勉強を強制的に命令する（勉強しなさい）
      - 3.1.2 範囲を示して勉強を命令する（少しだけでもいいから勉強しなさい）
      - 3.1.3 テレビを禁止して勉強を命令する（テレビばかり見ないで勉強しなさい）
      - 3.1.4 立場を自覚させて勉強を命令する（もう6年生なんだから勉強しなさい）
      - 3.1.5 勉強を促す（勉強したらどう。勉強しないといけないでしょう）
    - 3.2 他者比較命令型：他者と比較しながら勉強の命令
      - 3.2.1 兄弟姉妹・友人で成績の良い人の例をあげる（〇〇さんを見習いなさい）
      - 3.2.2 他者との競争意識をあり、勉強を命令する（人に負けないように勉強しなさい）
    - 3.3 成績指摘命令型：成績を引き合いにした勉強の命令
      - 3.3.1 成績が悪かったことを非難して勉強を命令する（成績が悪かったから勉強しなさい）
      - 3.3.2 成績を上げるという目標を示して勉強を命令する（成績が上がるように勉強しなさい）
      - 3.3.3 将来の目標を示して勉強を命令する（就職がしたかったら勉強しなさい）
  - 4 理由強調型：勉強する理由を強調した勉強の間接的な命令
    - 4.1 将来利益強調型：勉強することによる将来の利益の強調
      - 4.1.1 先に勉強した方が楽だと強調する（先に勉強した方がいいよ）
      - 4.1.2 勉強すると成績が上がると強調する（勉強したら成績が上がるよ）
      - 4.1.3 勉強すると中学校で安心だと強調する（勉強したら中学校に行って安心よ）
      - 4.1.4 勉強すると将来りっぱになれると強調する（勉強したら将来えらくなるよ）
    - 4.2 将来不利益強調型：勉強しないことによる将来の不利益の強調
      - 4.2.1 あとで困っても知らないとき放す（あとで困っても知りませんよ）
      - 4.2.2 勉強しないとあとで困ると強調する（あとになって困るのは自分だよ）
      - 4.2.3 勉強しないと中学校で困ると強調する（中学生になって困るよ）
      - 4.2.4 勉強しないと進学に困ると強調する（勉強しないといい学校に行けなくなるよ）
      - 4.2.5 勉強しないと将来困ると強調する（勉強しないと将来困りますよ）
    - 4.3 現在不利益強調型：勉強しないことによる現在の不利益の強調
      - 4.3.1 勉強しないと他の強者の叱責があると強調する（勉強しないと先生に叱られるよ）
      - 4.3.2 勉強しないと屈辱を受けると強調する（勉強しないとバカにされるよ）
      - 4.3.3 勉強しないと成績が悪くなると強調する（勉強しないと人と差がつくよ）
-

表3 (続き)

- 
- 4.4 時間強調型：遅くなるという理由で勉強の命令
    - 4.4.1 遅くなるという理由で勉強を命令する（早く勉強しなさい。遅くなるよ）
  - 5 説得・激励型：勉強の説得あるいは激励
    - 5.1 説得型：勉強の説得
      - 5.1.1 勉強するように説得する（勉強は自分のためよ。自分で考えて勉強しなさい）
    - 5.2 願望型：母親の願望
      - 5.2.1 母親の願望を言う（お願いだから勉強して。お母さんのために）
    - 5.3 激励型：勉強の激励
      - 5.3.1 勉強するように激励する（がんばって勉強しなさいね）
  - 6 問いかけ型：問いかけを伴う婉曲的命令
    - 6.1.1 宿題の有無を聞き、勉強を命令する（宿題はあったの。早くしてしまいなさいよ）
    - 6.1.2 宿題の有無を聞き、ある場合に勉強を促す（宿題はあったの。あったらやりなさいよ）
    - 6.1.3 宿題が終わったか聞き、まだの場合に勉強を促す（宿題はすんだの。まだならやりなさい）
    - 6.1.4 宿題をしたかどうか聞く（宿題すんだ？勉強したの？）
    - 6.1.5 宿題の有無を聞く（宿題ないの？勉強ないの？）
    - 6.1.6 勉強のことを聞く（勉強は？勉強しなくていいの？）
  - 7 順序重視型：テレビを見ることを認めながら、先に勉強することを命令
    - 7.1.1 勉強後にテレビを見るよう命令する（勉強してからテレビを見なさい）
    - 7.1.2 テレビはあとでも見られることを示し、勉強を命令する（…先に勉強してしまいなさい）
    - 7.1.3 テレビを見ることを容認し、勉強を促す（テレビもいいけど勉強しなさい）
    - 7.1.4 テレビを見たいなら勉強するように命令する（テレビが見たいなら勉強しなさい）
    - 7.1.5 勉強後にテレビを見てもいいと約束する（勉強したら見てもいいよ）
  - 8 報酬・譲歩型：報酬を提示した勉強の促しあるいはあとで勉強することへの譲歩
    - 8.1 報酬型：報酬を提示した勉強の促し
      - 8.1.1 報酬を提示して勉強を促す（あとでおやつをあげるから勉強しなさい）
    - 8.2 譲歩型：あとで勉強することへの譲歩
      - 8.2.1 テレビを見たあとで勉強するように言う（テレビが終わったら勉強しなさい）
  - 9 その他
    - 9.1.1 （勉強しないならお手伝いしてちょうだい）
- 

ドを集め、49個の小分類カテゴリーを決定した。さらに、それを19個の中分類カテゴリーにまとめ、最終的に9個の大分類カテゴリーにまとめた。これら、大、中、小の分類カテゴリーの名称、内容および具体例を表3に示す。

## 2. カテゴリーの出現率

### (1)大カテゴリー

大カテゴリーの出現頻度と出現率を条件別に表4に示した。表4に基づいて、各カテゴリーの出現率を、条件別に検討する。

現実場面・受容反応条件：命令型（48.1%）が最大であり、次いで理由強調型（18.9%）、問いかけ型（14.4%）が続く。予想された説得・激励型（1.6%）や報酬・譲歩型（2.8%）はほとんどみられず、命令型のことばによって受容反応が生じることに特徴があ

る。

現実場面・反発反応条件：命令型（56.3%）が半数を越え、理由強調型（14.5%）がこれに続く。ここでは、非難・皮肉型（8.3%）や強制・禁止型（7.4%）が問いかけ型（7.3%）と共にいくらかみられる。

仮想場面・受容反応条件：報酬・譲歩型（30.2%）が最大で、次いで理由強調型（21.2%）、命令型（15.7%）、順序重視型（11.6%）となる。説得・激励型（8.3%）や強制・禁止型（7.3%）もある程度受容反応をもたらすと認知されている。

仮想場面・反発反応条件：命令型（67.6%）が3分の2を占め、理由強調型（13.5%）がこれに続く。強制・禁止型（6.3%）と非難・皮肉型（6.1%）も若干みられる。

### (2)中カテゴリー

中カテゴリー出現頻度と出現率を条件別に表6に示した。表6に基づいて、各カテゴリーの出現率を、条件別に検討する。

現実場面・受容反応条件：単純命令型(46.1%)が最も多く、問いかけ型(14.4%)、将来不利益強調型(9.0%)、順序重視型(7.8%)、現在不利益強調型(5.9%)がこれに続く。

現実場面・反発反応条件：単純命令型(49.9%)が最大で、現実不利益強調型(8.5%)、問いかけ型(7.3%)のほかに、罰提示強制型(5.6%)、他者比較命令型(4.8%)、非難型(4.4%)などがわずかに認められる。

仮想場面・受容反応条件：報酬型(22.8%)、単純命令型(13.3%)、順序重視型(11.6%)のほかに、現在不利益強調型(8.3%)、将来不利益強調型(7.9%)、譲歩型(7.4%)、罰提示強制型(7.1%)がいくらかみられる。

仮想場面・反発反応条件：単純命令型(60.9%)が圧倒的に多く、これ以外には、現実不利益強調型

(8.7%)、罰提示強制型(5.2%)、非難型(4.8%)なども多少みられる。

### (3)小カテゴリー

小カテゴリーの出現頻度と出現率の表示と説明は省略する。

### 3. カテゴリー出現率の条件間比較

表4、表6のカテゴリー出現率を角変換し、その角変換値を利用して、個々のカテゴリーごとに場面要因と反応要因の2×2分散分析を行った結果およびその下位検定の結果を整理したのが表5、表7である。表5、表7における不等号は、分散分析で有意であった主効果の方向および下位検定の2条件間比較で有意であった差の方向を表している。また、○印は、分散分析で有意であった交互作用効果を表す。有意水準は5%に設定した。なお、2つの要因は共に被験者内要因であるが、ここでは便宜的に被験者間要因とみなして分析を行った。

本研究で使用した標本は、通常の実験的研究の場合

表4 大カテゴリーの出現頻度と出現率

	現実場面				仮想場面			
	受容反応条件		反発反応条件		受容反応条件		反発反応条件	
1 強制・禁止型	31	3.7	38	7.4	80	7.3	69	6.3
2 非難・皮肉型	9	1.1	43	8.3	6	0.5	67	6.1
3 命令型	400	48.1	291	56.3	173	15.7	744	67.6
4 理由強調型	157	18.9	75	14.5	233	21.2	149	13.5
5 説得・激励型	13	1.6	3	0.6	91	8.3	6	0.5
6 問いかけ型	120	14.4	38	7.3	34	3.1	24	2.2
7 順序重視型	65	7.8	13	2.5	128	11.6	25	2.3
8 報酬・譲歩型	23	2.8	3	0.6	333	30.2	4	0.4
9 その他	14	1.7	13	2.5	23	2.1	13	1.2

表5 大カテゴリー出現率の分析結果

	分散分析			下位検定：場面差		下位検定：反応条件差	
	場面主効果	反応主効果	交互作用効果	受容反応条件	反発反応条件	現実場面	仮想場面
	現実VS仮想	受容VS反発		現実VS仮想	現実VS仮想	受容VS反発	受容VS反発
1 強制・禁止型	n.s.	n.s.	○	<	n.s.	<	n.s.
2 非難・皮肉型	>	<	n.s.	n.s.	n.s.	<	<
3 命令型	>	<	○	>	<	<	<
4 理由強調型	n.s.	>	○	n.s.	n.s.	>	>
5 説得・激励型	<	>	○	<	n.s.	>	>
6 問いかけ型	>	>	○	>	>	>	n.s.
7 順序重視型	n.s.	>	○	<	n.s.	>	>
8 報酬・譲歩型	<	>	○	<	n.s.	>	>
9 その他	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	>	n.s.	n.s.

(注1) 表内の不等号は、主効果および条件差が有意な場合の差の方向を示す。また、交互作用欄の○印は、交互作用が有意であることを示す。

(注2) 有意水準は5%で設定した。

表6 中カテゴリーの出現頻度と出現率

	現 実 場 面				仮 想 場 面			
	受容反応条件		反発反応条件		受容反応条件		反発反応条件	
1.1 罰提示強制型	25	3.0	29	5.6	78	7.1	57	5.2
1.2 禁止型	6	0.7	9	1.7	2	0.2	12	1.1
2.1 非難型	5	0.6	23	4.4	2	0.2	53	4.8
2.2 皮肉型	4	0.5	20	3.9	4	0.4	14	1.3
3.1 単純命令型	383	46.1	258	49.9	146	13.3	671	60.9
3.2 他者比較命令型	9	1.1	25	4.8	11	1.0	33	3.0
3.3 成績指摘命令型	8	1.0	8	1.5	16	1.5	40	3.6
4.1 将来利益強調型	13	1.6	3	0.6	44	4.0	1	0.1
4.2 将来不利益強調型	75	9.0	21	4.1	87	7.9	49	4.5
4.3 現在不利益強調型	49	5.9	44	8.5	91	8.3	96	8.7
4.4 時間強調型	20	2.4	7	1.4	11	1.0	3	0.3
5.1 説得型	5	0.6	1	0.2	29	2.6	4	0.4
5.2 願望型	0	0.0	2	0.4	9	0.8	2	0.2
5.3 激励型	8	1.0	0	0.0	53	4.8	0	0.0
6.1 問いかけ型	120	14.4	38	7.3	34	3.1	24	2.2
7.1 順序重視型	65	7.8	13	2.5	128	11.6	25	2.3
8.1 報酬型	7	0.8	0	0.0	251	22.8	3	0.3
8.2 譲歩型	16	1.9	3	0.6	82	7.4	1	0.1

(注1) 6.1と7.1のカテゴリーは、大カテゴリーの6と7に対応する。

表7 中カテゴリー出現率の分析結果

	分 散 分 析			下位検定：場面差		下位検定：反応条件差	
	場面主効果	反応主効果	交互作用 効果	受容反応条件	反発反応条件	現実場面	仮想場面
	現実VS仮想	受容VS反発		現実VS仮想	現実VS仮想	受容VS反発	受容VS反発
1.1 罰提示強制型	<	n.s.	○	<	n.s.	<	n.s.
1.2 禁止型	n.s.	<	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	<
2.1 非難型	n.s.	<	n.s.	n.s.	n.s.	<	<
2.2 皮肉型	<	>	○	<	<	n.s.	>
3.1 単純命令型	>	<	○	>	<	n.s.	<
3.2 他者比較命令型	n.s.	<	n.s.	n.s.	n.s.	<	<
3.3 成績指摘命令型	<	<	n.s.	n.s.	<	n.s.	<
4.1 将来利益強調型	n.s.	>	○	<	n.s.	>	>
4.2 将来不利益強調型	n.s.	>	n.s.	n.s.	n.s.	>	>
4.3 現在不利益強調型	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	<	n.s.
4.4 時間強調型	>	>	n.s.	>	>	n.s.	n.s.
5.1 説得型	<	>	n.s.	<	n.s.	n.s.	>
5.2 願望型	<	n.s.	○	<	n.s.	<	n.s.
5.3 激励型	<	>	○	<	n.s.	>	>
6.1 問いかけ型	>	>	○	>	>	>	n.s.
7.1 順序重視型	n.s.	>	○	<	n.s.	>	>
8.1 報酬型	<	>	○	<	<	>	>
8.2 譲歩型	<	>	○	<	n.s.	>	>

(注1) 表5の(注1)、(注2)に共通。

に比べて極めて大きく( $n=808$ ), わずかな出現率の差が有意となるので, 統計上の有意差が直ちに現実的に意味のある差とは解釈しがたい。したがって, 表5, 表7, 表9で得られた分析結果についての記述と解釈を省略し, 出現率に関する条件差が一定の大きさを越える場合のみを抽出して, 考察を行うことにする。

#### 4. カテゴリー出現率の場面差

受容反応条件あるいは反発反応条件における出現率が, 現実場面と仮想場面とで10%以上異なるカテゴリーのみを表8に示した。表8内の不等号は差の方向を示す。

##### (1)受容反応条件における場面差

大カテゴリー：現実場面に比べて, 仮想場面では, 報酬・譲歩型の出現率が高く, 逆に, 命令型と問いかけ型の出現率が低い。

中カテゴリー：現実場面に比べて, 仮想場面では, 報酬型の出現率が高いが, 単純命令型と問いかけ型の出現率が低い。

小カテゴリー：現実場面に比べて, 仮想場面では, 勉強強制型とテレビ禁止・勉強強制型の出現率が低い。

##### (2)反発反応条件における場面差

大カテゴリー：現実場面に比べて, 仮想場面では, 命令型の出現率が高い。

中カテゴリー：現実場面に比べて, 仮想場面では, 単純命令型の出現率が高い。

小カテゴリー：現実場面に比べて, 仮想場面では, テレビ禁止・勉強強制型の出現率が高い。

##### (3)場面差の特徴

命令型(大), 単純命令型(中), テレビ禁止・勉強強制型(小)のことは, 現実場面に比較して, 仮想場面において, 受容反応をより減少し, 反発反応をより増加する。

問いかけ型(大, 中), 勉強強制型(小)のことは, 現実場面と比較して, 仮想場面において, 受容反応をより減少する。

報酬・譲歩型(大), 報酬型(中)のことは, 現実場面に比較して, 仮想場面において, 受容反応を増加する。

#### 5. カテゴリー出現率の反応条件差

現実場面あるいは仮想場面における出現率が, 受容反応条件と反発反応条件とで10%以上異なるカテゴリーのみを表9に示した。表9内の不等号は差の方向を示す。

##### (1)現実場面における反応条件差

受容反応条件と反発反応条件におけるカテゴリー出現率の間に10%以上の差を示すカテゴリーは皆無であっ

表8 10%以上の場面差のみられるカテゴリー

	受容反応条件			反発反応条件			差の差 (交互作用)
	現実場面	仮想場面	差	現実場面	仮想場面	差	
大 3 命令型	48.1	> 15.7	32.4	56.3	< 67.6	-11.3	43.7
6 問いかけ型	14.4	> 3.1	11.3	—	—	—	—
8 報酬・譲歩型	2.8	< 30.2	-27.4	(0.6)	(0.4)	(0.2)	27.6
中 3.1 単純命令型	46.1	> 13.3	32.8	49.9	< 60.9	-11.0	43.8
6.1 問いかけ型	14.4	> 3.1	11.3	—	—	—	—
8.1 報酬型	0.8	< 22.8	-22.0	(0.0)	(0.3)	(-0.3)	21.7
小 3.1.1 勉強強制型	19.7	> 6.1	13.6	—	—	—	—
3.1.3 テレビ禁止・勉強強制型	20.3	> 2.5	17.8	19.9	< 42.1	-22.2	40.0

表9 10%以上の反応条件差のみられるカテゴリー

	現実場面			仮想場面			差の差 (交互作用)
	受容条件	反発条件	差	受容条件	反発条件	差	
大 3 命令型	(48.1)	(56.3)	(-8.2)	15.7	< 67.6	-51.9	43.7
8 報酬・譲歩型	(2.8)	(0.6)	(2.2)	30.2	> 0.4	29.8	27.6
中 3.1 単純命令型	(46.1)	(49.9)	(-3.8)	13.3	< 60.9	-47.6	43.8
8.1 報酬型	(0.8)	(0.0)	(0.8)	22.8	> 0.3	22.5	21.7
小 3.1.3 テレビ禁止・勉強強制型	(20.3)	(19.9)	(0.4)	2.5	< 42.1	-39.6	40.0

た。

## (2) 仮想場面における反応条件差

大カテゴリー：受容反応条件に比べて、反発反応条件では、命令型の出現率が高く、報酬・譲歩型の出現率が低い。

中カテゴリー：受容反応条件に比べて、反発反応条件では、単純命令型の出現率が高く、報酬型の出現率が低い。

小カテゴリー：受容反応条件に比べて、反発反応条件では、テレビ禁止・勉強強制型の出現率が高い。

## (3) 反応条件差の特徴

仮想場面において、命令型(大)、単純命令型(中)、テレビ禁止・勉強強制型(小)のことは、受容反応よりも反発反応の方をより引き起こしやすいが、報酬・譲歩型(大)、報酬型(中)のことは、反発反応よりも受容反応の方をより引き起こしやすい。しかし、現実場面では、受容反応あるいは反発反応をより引き起こしやすいカテゴリーは認められない。

# 考 察

## 1. 言語刺激の場面差と反応条件差

### (1) 場面差

カテゴリー出現率に関する現実場面と仮想場面の差は、受容反応条件に比べて、反発反応条件の方でより小さい。すなわち、子どもの受容反応を引き起こす母親の言語刺激のタイプは、現実場面と仮想場面ではかなりの差異が認められるけれども、反発反応を引き起こす言語刺激のタイプは、現実場面であっても、仮想場面であっても、それほど大きな差異はなくて、比較的類似している。したがって、言語的脅威による反抗に焦点を絞って研究を進める場合には、現実場面における母親の言語刺激の実態を報告させなくても、仮想場面における母親の言語刺激を推測的に認知させることによって、目的を十分に達成できることが明らかとなった。

### (2) 反応条件差

カテゴリー出現率に関する受容反応条件と反発反応条件の差異は、現実場面よりも、仮想場面の方でより大きい。すなわち、現実場面において子どもの受容反応と反発反応とを引き起こす母親の言語刺激のタイプの間には、あまり大きな差異は認められないが、仮想場面においては両反応を引き起こす言語刺激のタイプの間には大きな差異が存在する。これは、以下のように解釈できる。

現実生活の中で、子どもは、母親の同一の言語刺激に対して、あるときは受容反応を示し、またあるとき

は反発反応を示すというように、同一言語刺激が相反する2種類の反応を生じさせるが、そこには非言語的的刺激が作用しているように思われる。例えば、同一の言語刺激であっても、その言語刺激の非言語的側面(語調や声の大きさなど)の差異や、その言語刺激に伴う非言語的行動(表情や身ぶりなど)の差異が、同一言語刺激によってもたらされる反応の差異を説明するかもしれない。現実場面では、常にこうした非言語的的刺激が言語刺激に付随しているので、言語刺激のみを記述させる方法は、現実場面における脅威を検討する場合には不適切であるかもしれない。

他方、仮想場面において、子どもの受容反応と反発反応とをもたす母親の言語刺激のタイプの間にも明瞭な差異があると認知されたのは、現実場面における非言語刺激が捨象され、純粋に言語刺激の差異が子どもに意識されたことによるのかもしれない。また、現実には母親が使用するわけではないが、理想として言うてほしいことば(受容反応を引き起こす言語刺激)と、言うてほしくないことば(反発反応を引き起こす言語刺激)が、子どもの認知レベルにおいて明瞭に弁別され、存在しているとも考えられる。

いずれにせよ、相対立する2種類の反応を生じさせる言語刺激は、現実場面と比べて、仮想場面においてよりその差異が強調化され、明瞭化されると解釈できる。すなわち、この種の研究で仮想場面を使用することは好ましくないのではなく、むしろ条件差をより敏感に反映させることができるという意味で、仮想場面の使用が積極的に推進されてよいといえる。

## 2. 仮想場面の信頼性

仮想場面を使用することの信頼性に関して、さらに別の視点から検討を加える。現実場面において言語刺激の分析に用いた被験者は、受容反応条件では、母親から勉強を強制されて受容反応が生じた経験のある被験者(832人)であり、反発反応条件では、反発反応が生じた経験のある被験者(517人)であった。すなわち、受容反応条件では、受容反応が生じた経験のない被験者(269人)、反発反応条件では、反発反応が生じた経験のない被験者(584人)は、現実場面におけるデータ分析の対象から除外された。こうした、受容反応あるいは反発反応の経験の有無が、仮想場面における認知レベルでの回答にどのような影響を及ぼすかを検討するために、反応条件別に、大カテゴリーおよび中カテゴリーの出現率を、経験有群と経験無群とで比較した。

その結果、受容反応条件では、大カテゴリーの報酬・譲歩型と中カテゴリーの譲歩型が、それぞれ経験有群(28.2%, 6.3%)よりも経験無群(36.4%, 11.2%)の力で有意に多かったが、その差はわずかに8.2%と

4.9%にすぎなかった。反発反応条件におけるカテゴリ出現率に関しては、経験有群と経験無群の間に有意差の認められる大カテゴリあるいは中カテゴリは皆無であった。

したがって、母親からの言語刺激によって受容反応あるいは反発反応が生じたことがあるかどうかという現実経験は、仮想場面における母親の言語刺激に対する子どもの認知にほとんど影響しておらず、子どもは、そうした経験の有無にかかわらず、同様の認知をもつことが判明した。これは、仮想場面から得られるデータが信頼できることを示す1つの証拠となろう。

### 3. 将来の研究課題

#### (1) 順序効果

本研究では、母親の言語刺激の記述を求める4種類の設問(場面×反応条件)を同一順序で全被験者に提示した。これは、回答のしやすさを配慮したための構成順序であったが、そのことによって結果に順序効果が影響した可能性は否定できない。したがって、本研究の方法は厳密さに欠けるという批判を免れることは難しい。こうした批判を回避するためには、4種類の設問の配列順序の全組み合わせである24通りの調査用紙を用意しなければならない。しかし、順序効果を相殺することによって、回答のしやすさという利点が失われ、不自然な印象を被験者に与える恐れが多分にある。

そこで、回答のしやすさがある程度保障され、不自然な印象を与えずに順序効果の混入を防ぐ方法としては、同一場面内の2種類の反応条件をセットにしながらい配列するやり方が考えられる。すなわち、場面の配列順序が2通り、セット内の反応条件の配列順序の組み合わせが $2 \times 2$ の4通りであるので、合計8通りの設問配列が存在する。この方法を用いれば、調査用紙作成上およびデータ集計上の繁雑さもかなり軽減できよう。

#### (2) 性差

本研究では、男子用と女子用の2種類の調査用紙を作成したが、性差の分析は行わなかった。この点について、今後検討する必要があるだろう。

#### (3) 発達差

子供の年齢段階によって、母親の言語刺激それ自体が変化し、また同一の言語刺激であっても子どもにとってそれがもつ意味は変化すると考えられる。本研究では、小学校6年生を被験者としたが、他の年齢段階の

被験者からも広範にデータを収集し、発達差を説明する必要がある。

#### (4) 場面の拡大

本研究で得られた母親の言語刺激は、「子どもがテレビを見ているときに、勉強を強制する場面」に関するものであり、この結果は直ちに一般化できるわけではない。日常的な反抗場面を複数使用することによって、母親の言語的脅威と子どもの反抗との関係を検討し、結果の一般化を図らねばならない。

#### (5) 非言語的的刺激

本研究では、子どもの特定の反応を引き起こす母親の言語刺激を検討した。しかし、本研究の結果から、現実経験として子どもが母親から与えられる言語刺激には、特定の非言語的的刺激が伴っていて、それが言語刺激を意味づけている可能性があるとして唆された。したがって、現実経験に基づいて、母親の言語刺激を子どもに報告させる場合には、母親の非言語的的刺激を考慮した研究を計画する必要があるだろう。

## 引用文献

- Brehm, J.W. 1966 *A theory of psychological reactance*. New York: Academic Press.
- Brehm, S.S., & Brehm, J.W. 1981 *Psychological reactance: A theory of freedom and control*. New York: Academic Press.
- 深田博己 1983 心理的反発に関する発達的研究 島根大学教育学部紀要(教育科学), 17, 31-39.
- 深田博己 1986 a 幼児の心理的反発に及ぼす順態度的脅威と反態度的脅威の効果 島根大学幼年期教育研究, 3, 19-27.
- 深田成子 1986 b 子どもの心理的反発に及ぼす母親の言語的脅威の効果 鳥取女子短期大学研究紀要, 15, 84-91.
- 中西信男 1959 反抗行動の発達的研究 教育心理学研究, 6, 144-152.
- 中西信男 1971 反抗の心理 福村出版 Pp.124-131.
- 関計夫 1958 発達段階と反抗期 九州大学教育学部紀要(教育心理学編), 5, 1-22.
- Wicklund, R.A. 1974 *Freedom and reactance*. Potomac, Maryland: Lawrence Erlbaum Associates.